

## ワンポイント・ブックレビュー

内田 樹著『下流志向 学ばない子どもたち、働かない若者たち』講談社（2007年）

『学ばない子どもたち』『働かない若者たち』 どちらに対しても「最近の若者たちは…」と豊かな時代に育ってきた若者の怠慢さに原因を求めることで話が終わりがちな話題である。若者たちのこのような行動にいたる判断は一見すると“合理的”ではない。しかし、本書ではそういった思い込みを排し、若者たちの行動に“合理的”な判断が存在する可能性を指摘している。キーワードは「消費」とその「無時間性」である。

著者がこの着想に至った背景は著者が勤務する大学での学力低下の実情である。「大学一年生が少し前の中学二年生ぐらいの英語力（中略）しかないというのは、怠惰とか注意力不足というのではちょっと違うのではないかとそのときに思いました。変な言い方ですけど、かなり努力しないとそこまで学力を低く維持するのはむずかしいと思うからです」。つまり、学力低下は若者の怠慢のために起こっているのではなく、若者自身がそのようなあり方を積極的に選択していることを想起するのである。

著者は、このような若者たちの“合理性”を「消費」という概念を用いて説明している。著者に言わせれば学ばない子どもたちは“賢い消費者”を演じているというのだ。幼いうちからお金を使うことによって、早くから消費者としての訓練を受けてきた子どもたちは、教育の場においても自分自身に有利な「等価交換」を教員との間に果たそうとする。ただし、子どもたちは教育に対し、自分で「現金」を支出してはいない。ここで、著者は次のことを指摘している。子どもたちが教育の対価としているものは「苦痛」である。そして、子どもたちは「苦痛」と「教育」との「等価交換」を図っており、「教育」に価値がないと判断すれば「苦痛」を差し出すべきではないと判断する。それによって子どもたちの学びからの積極的な逃避が生じている。

ここで、著者が本質的に抱えている問題とは、物事を容易に価値がないと判断できてしまうことである。教育や労働から得られるものは、金銭やスキルなど簡単に測定可能なものだけではないし、当初にはその営為から獲得するものがあるのか、ないのかもはっきりしない。しかし、“賢い消費者”としてはそのような不透明取引に耐えることができない。その背景が著者の指摘する消費における「無時間性」である。著者の表現を借りれば「代価の提示と、商品の交付の間に時間差があることに耐えられない」のだ。「無時間性」の制約のもとでは、若者たちは経験したことがないものを「価値がない」と判断するしかないのだ。

とき同じくして、社会経済生産性本部による「働くことの意識」調査報告書は平成19年度の新入社員のことを「デイトレーダー型」と表現している。若者たちによる「消費」や「無時間性」をフレームワークとした価値評価は、教育、労働にとどまらず、企業、労働組合を含む集団・組織への参加にも及んでいるのかもしれない。組織・集団への参加をめぐるのは、もう一方で、インターネットのコミュニティやテーマパークに典型的であるように、参加は市場経済のなかに強固に位置づけられてもいる。そこにおける参加者とは組織の担い手となることは想定されていない、常に消費者としてありつづける参加者なのだ。参加の概念も転換しつつある。(S.O)